

保育者養成校における学生の学校経験と実習経験 －1年生への質問紙調査の分析から－

What do the Students Learn from the Curriculum and Practical Training in the Child-Care Worker Training Course?: An Analysis of First Year Students Survey Results

酒井 真由子¹

SAKAI Mayuko

中村 瑛 仁³

NAKAMURA Akihito

木村 光 男⁵

KIMURA Mitsuo

山口 美 和²

YAMAGUCHI Miwa

千葉 直 紀⁴

CHIBA Naoki

紅 林 伸 幸⁶

KUREBAYASHI Nobuyuki

概要

本研究の目的は、保育者養成カリキュラムのもとで学ぶ1年生に対して、現在の学校での学習や実習における経験や保育職に対する意識を尋ねる質問紙調査を実施し、保育者を志す学生の社会化の一側面を明らかにすることである。さらに、保育者養成期間が2年間である専門学校や短期大学の学生と4年制大学の学生を比較し、社会化のプロセスに違いがあるのかを検討する。保育者養成課程がある学校の1年生を対象とし、専門学校1校、短期大学7校、4年制大学3校の1年生968名中408名から回答を得た（回収率 42.1%）。専門学校・短大生群と大学生群でクロス分析を行った結果、専門学校・短大生群の学生の方が大学生群の学生よりも、より強く保育者になることを志向し、保育に関する学習にも力を入れている傾向があることが分かった。また、大学生群の学生の方が保育者の専門性を低く見積もることや保育職を取り巻くシステムに目を向ける傾向があることが明らかになった。キャリアに関する設問からは、専門

¹ 上田女子短期大学幼児教育学科

² 上越教育大学大学院学校教育研究科

³ 大阪大学大学院人間科学研究科

⁴ 上田女子短期大学幼児教育学科

⁵ 常葉大学教育学部初等教育課程

⁶ 常葉大学大学院初等教育高度実践研究科

学校・短大生と大学生の両群ともに、保育職に対して一生続けられる仕事であるという認識が低い結果となった。

キーワード：保育者養成、実習指導、実習経験、カリキュラム、保育者の予期的社会化

1. はじめに

我が国では、保育園における待機児童の解消に向けて、受け入れ児童数拡大のための保育の量的拡充とそれに伴う保育人材の確保が急務となっている。そこで、国や自治体では保育人材確保のために、新規資格取得者支援、就業継続支援、離職者の再就職支援、保育士に対する処遇改善の実施といった対策を打ち出している。

これらの保育人材確保のための施策は、小・中学校の教員施策とは異なる特徴がある。離職問題への対応が大きな割合を占めているのである。実は、令和3年1月の保育士の有効求人倍率は2.94であり、高い倍率とは言えないが、新規採用者や保育職希望者が不足しているわけではない。問題は、平成29年時点で保育士9.3%、私営保育所の10.7%という、離職率の高さにある。毎年1割もの離職者が出るということは、人材不足が常態化していることを意味する。したがって、養成の充実と併せて離職を抑えるための施策が必要となっているのである。

保育士の離職に関しては、保育士の処遇に原因があるとする説がとられることが多い。処遇に問題があるとすれば、それは処遇の改善をすれば解決する。しかし、問題はそんなに簡単なのだろうか。そもそも保育士を志望する学生たちは、保育士の処遇がどのようなものであり、離職率が専門職に珍しく高いことを知った上で、それを志望している。その予想を用いた授業実践を上回る劣悪な処遇とは何なのだろうか。それを明らかにすることは、保育士の離職問題の解消のために重要だろう。そして、今一度、処遇原因説そのものを疑うことも必要だろう。別の要因があるとすれば、その要因を明らかにしなければ、離職者は減らず、保育士不足は解消されない。以上の問題意識に基づき、我々は1割が離職する保育士の文化⁽¹⁾に注目し、その特徴に総合的にアプローチする研究プロジェクトを開始した。本稿は、その中で実施した、第1回質問紙調査の結果報告である。(酒井)

2. 処遇原因説から保育者文化原因説へ

処遇とは別の問題に注目した研究には以下のようなものがある。その第一は、保育者を志す学生が保育者養成校で教育を受けて保育者になっていく社会化の過程において、それまでに思い描いていた保育職のイメージと現実との間に何らかのギャップが生じている可能性を指摘するものである。日野他(2018)が行った保育者養成校の卒業生を対象としたアンケート調査によると、保育者養成校在学中に抱いていた職場イメージと、保育施設に就職した後に抱くようになった職場イメージとの間にズレを感じている卒業生の割合は40.5%にも上るといふ。さらに、同調査において、卒業生に対して保育者養成校での就職活動支援として必要だと考える教育内容は何かを尋ねた結果、「就職先を選ぶ視点を学ぶ」「自分に合う仕事を知ることができる」「先

輩の就職活動の話を書く機会を持つ」「社会人としてのルールやマナーを学ぶ」という意見が多いことが明らかとなっている（日野他2018）。つまり、保育者を志す学生が、学生時代に保育施設に対して抱く職場イメージは、保育施設に就職してから直面する現実と合致していないということであり、保育者養成校の卒業生は、学生時代に就職先を選ぶ視点や、保育者の仕事が自分に合っているかどうかを学ぶ機会が必要だったと考えているということである。日野他の研究からは、保育者志望学生の抱く職場イメージと現実との間にはズレが生じており、保育者養成プログラムにおける社会化の過程で、そのズレが十分に解消されていない可能性が示唆される。

イメージギャップによる保育士の離職を抑えるためには、学生が思い描く保育職のイメージと就職後の現実との間のギャップを埋めるための手を打つことが必要となる。それを初任期の指導体制に求めた研究が谷川（2018）である。学部段階から初任期に至る4年間の継続的インタビュー調査により、保育者が現場で体験するリアリティショックの実態と、それを反省的に乗り越える初任期の探究的省察のプロセスを明らかにしている。谷川の研究は示唆に富み、離職しないための思考法を教えてくれる。しかし、基本的に現場での対応に焦点を当てる研究であるために、リアリティショックを必然とし、リアリティショックが養成課程において作られるという観点、さらにはそれが離職の要因になっていく保育者の意味世界に切り込む観点を欠いている。

これらのイメージギャップ、リアリティショックに関する研究も、処遇問題と同様、現場の体験を事実のレベルで捉えている点で共通している。イメージやリアリティは、行為者の主体的で、おそらくは実際には極めて社会的な構築物であり、それがどのように作られているのかを問題化することを必要としている。体験の意味、はたまたギャップの意味に切り込むためには、それらの意味基盤が生み出される過程とその意味基盤の実態にアプローチしなくてはならない。つまり、保育者の体験の意味基盤を作り上げているものとして、現在の保育者養成カリキュラムの実態を明らかにするとともに、保育者養成校におけるカリキュラムが、学生が保育者になっていくまでの社会化のプロセスにどのように影響しているのかを追跡的に調査することが必要なのである。

こうした問題意識のもと、保育者を志す学生が保育者養成校に入学し、現在の保育者養成校におけるカリキュラムのもとで学び、保育者養成校を卒業して保育者になっていくプロセスにおいて、どのような社会化が起こるのかを追跡することを企図した研究を開始することとした。本稿は、その第一段階となる調査である。本調査では、保育者養成カリキュラムのもとで学ぶ1年生に対して、学習状況や生活状況、保育職に対する意識を尋ねる質問紙調査を実施し、保育者を志す学生の社会化の一側面を明らかにすることを目的とする。さらに、保育者養成期間が2年間である専門学校や短期大学の学生と4年制大学の学生を比較し、社会化のプロセスの違いがあるのかを検討する。

保育者養成校における保育者志望の学生の社会化を明らかにするにあたり、多数の研究の蓄積がある小学校・中学校の教師の養成段階における社会化に関する研究が参考になる。教員養

成における教育実習に着目した研究では、教育実習は教員養成プログラムだけでなく、教師になってからのライフコースにも大きな役割を担っていること（紅林・川村2001）、教育実習は学生が学校文化や教師文化を学校現場で体験し身体化する機会になっていること（川村他2018）が指摘されている。また、川村他（2015）らは、教職志望学生を対象とした4年間のパネル調査における1年時－2年時の調査データから、学生は1年時から2年時にかけて、教職志望度を低下させつつも大学での学習時間を増加させていること、そのようななかで、大学での学習を通して、献身的な教師や専門職としての教師といった既存の教師観を強く保持するようになっていることを明らかにしている。このように、教員養成の分野では、教職を志望する学生は、大学での教員養成プログラムのもとで教師としての規範や行動様式を学習し内面化していくという教師の予期的社会化の過程が研究されてきた。しかし、保育者養成の分野での保育者の予期的社会化に関する研究は見当たらない。保育者志望学生の養成段階における学習状況や生活状況、そして保育職に対する意識を検証することにより、保育者の予期的社会化のプロセスが明らかになれば、保育者の離職防止を念頭においた保育者養成のあり方を考える上で意義があるだろう。

なお、この質問紙調査をふまえた次のステップとして、保育者養成校の2年生を対象とした質問紙調査と、保育者養成校の卒業年次生を対象とした質問紙調査およびインタビュー調査（学生調査）を実施する計画である。そのため、今回の質問紙調査は、本プロジェクトの全体に関わる予備的探索という意味合いも含んでおり、本報告においては、実態の紹介と併せて、今後の分析の観点となり得る可能性のある点について整理したい。（紅林）

3. 調査の概要

3-1 調査方法と調査期間

本調査の対象は、保育者養成校に通う1年生である。1年生を対象とした理由は、保育者養成校に入学した時点での保育者志望度と養成校での経験を把握できる時期だからである。調査期間は令和3年1月～令和3年3月である。1年生がひととおりの授業や実習を終えた時期を見計らって調査を実施した。コロナ禍により対面での授業ではなく、オンライン授業を行っている養成校が多かったことから、本調査研究はWebによる質問紙調査を実施した。ただし、実施校の事情によって、紙媒体による調査票での実施も可能とした。

調査対象校には、保育者養成課程がある専門学校1校、短期大学7校、4年制大学3校を選定した。次に、各学校の担当者に調査協力の「依頼状」と「Webアンケートマニュアル」を送付した。その後、各学校の担当者から学生に「調査への協力依頼状」と「アンケート調査のURLとQRコード」をメール、もしくはオンラインのチャット機能を使って送ってもらい、紙媒体での調査の場合には直接配布してもらった。その後、個々の学生がWebもしくは紙媒体のアンケートに回答した。本調査は、上田女子短期大学研究倫理委員会の承認を得て行われた。

なお、本研究は完全な形は望めないにしても⁽²⁾パネルデータを作ることを狙いとしている。したがって、サンプルは代表性よりも継続的な調査の実施が可能であることを基準に選定した。

したがって、本報告の結果は、現時点において、保育者養成校の一般的な学生像を示していると言うことはできない。以下の集計結果は本研究におけるサンプルの特徴を示すものであることを断っておく。

3-2 回収率と回答者の基本的属性

専門学校、短期大学、4年制大学11校の1年生968名に調査票を配布し、408名から回答を得た。回収率は42.1%であった。有効回答数のうち、専門学校・短期大学は308件(75.5%)、4年制大学は94件(23.0%)、無回答が6件(1.5%)である。サンプルの概要は図表3-1に示したとおりである。今回の調査では、1年生の時点で幼稚園免許・保育士資格を取得しようと考えている学生は90.7%だった。そのうち、幼稚園教諭免許を取得予定の者は83.9%、保育士資格を取得予定の者は93.6%だった。

図表 3-1 調査サンプルの概要

		度数	%
専門学校 短期大学	A校	49	12.0
	B校	7	1.7
	C校	16	3.9
	D校	76	18.6
	E校	46	11.3
	F校	5	1.2
	G校	6	1.5
	H校	103	25.2
	大学	I校	50
J校		4	1.0
K校		40	9.8
性別	女	371	90.9
	男	10	2.5
	NA	27	6.6
幼稚園免許・保育士資格取得の有無	免許を取得する	370	90.7
	免許を取得しない	22	5.4
	NA	16	3.9
合計		408	100.0

卒業後の進路については、51.6%が保育施設（幼稚園が15.4%、保育所が27.2%、認定こども園が8.3%、野外保育施設が0.7%）への就職を希望しており、その他、乳児院3.9%、児童養護施設4.9%、障害者福祉施設2.0%といった福祉施設への就職を希望する学生が1割程度いる。そのほか、小学校や児童館、介護施設、民間企業への就職を希望するという回答もあった。また、「わからない」と答えた学生が20.3%おり、1年生の時点では卒業後の進路希望が定まっていない学生が全体の2割を占めていた。(酒井)

4. 調査結果

保育者養成校で学ぶ学生の学習状況や生活状況、保育職に対する意識とはどのようなものな

のか。本章において保育者養成校に通う学生の行動面や意識面を分析するねらいは、保育者を志す学生の社会化のプロセスを明らかにすることにある。しかし、保育者養成校には、保養成期間が2年間である専門学校や短期大学と4年制大学があり、安易に一括りにして議論することはできない。この多様な養成プロセスの形態を持つことが、保育者文化に何らかの影響を及ぼしていることは十分に予想される。もちろん影響がないことを確認できたならば、それは本研究の貴重な成果と言うことができるだろう。そこで、以下では基本的に専門学校・短期大学と大学とを区分したうえで⁽³⁾、両者の違いの有無に注目しつつ、2つの養成機関で学ぶ学生たちの学習状況や生活状況、意識における特徴や傾向を確認していく。(酒井)

4-1 保育者養成校入学前の学校選択に関する意識と保育体験

学生は現在の学校に進路を決めたのはいつ頃なのだろうか。図表4-1-1に示すように、現在の学校への進路決定時期は、専門学校・短大と大学では大きく異なっている。専門学校・短大、大学ともに「高校3年生」との回答が最も多いが、大学は約3分の2の学生が「高校3年生」と回答しているのに対して、専門学校・短大で「高校3年生」と回答した学生は3分の1に留まっている。専門学校・短大は「高校2年生」で選択したという学生が2割、小学校の時という学生も1割を超えており、総じて大学と比べて比較的進路決定が早いと言える。

図表 4-1-1 現在の学校に進路を決めた時期

	小学生	中学生	高校1年生	高校2年生	高校3年生	高校卒業後	わからない
専門学校・短大	13.8	16.0	8.9	20.9	33.3	5.7	1.4
大学	4.3	13.0	8.7	8.7	65.2	0.0	0.0

単位は%

では、学校選択の理由はどうか。図表4-1-2は、現在の学校を選択する時に重視したことである。専門学校・短大と大学の回答に大きな差が無かった項目が「D.しっかり勉強したい」「E.できれば他の学部に進み済みたかった」であり、どちらの学校を選択した学生も、ほぼ希望通りに所属校に入学し、高い意欲を持って学習活動を行っている。「B.勉強することが親になったときに役立つ」も共通して7割が「考えた」としており、保育者という職業を目指す学生の多くが、自身の将来の育児に資するものとして保育者という職業を選択していることが明らかになった。しかし、専門学校・短大と大学とで異なる傾向も確認される。専門学校・短大も大学も「A.保育者になりたい」という理由を挙げている学生は9割前後と多いが、「とても考えた」を選択した学生は、大学は5割強であるのに対して、専門学校・短大の学生は8割に及んでいる。「C.早く社会人になりたい」も同様に専門学校・短大の方が高い結果となっている。一方、大学が高い値を示した項目が「F.いろんな経験をしたい」と「G.やりたいことを見つけたい」であった。大学の学生の進路選択は保育士という目標がある程度は定まっているものの、まだ他の選択の可能性、検討の余地を残しているのに対し、専門学校・短大の学生は保育者という目標はかなり明確なものとなっており、その目標は社会人になるという成長願望を実現するも

のとなっているのである。

図表 4-1-2 現在の学校選択時に重視したこと

		とても 考えた	少し 考えた	あまり 考えなかった	全く 考えなかった	
A.保育者になりたい	専門学校・短大 大学	82.4 54.3	15.1 33.0	1.8 9.6	0.7 3.2	**
B.勉強することが親になったときに役立つ	専門学校・短大 大学	38.0 28.7	32.7 44.7	24.3 21.3	4.9 5.3	
C.早く社会人になりたい	専門学校・短大 大学	23.5 11.7	28.8 21.3	32.0 50.0	15.7 17.0	**
D.しっかり勉強したい	専門学校・短大 大学	37.8 39.4	49.1 53.2	9.9 6.4	3.2 1.1	
E.できれば他の学部に進みたかった	専門学校・短大 大学	5.3 5.4	13.1 14.0	28.3 25.8	53.4 54.8	
F.いろんな経験をしたい	専門学校・短大 大学	43.2 60.6	40.4 33.0	13.7 4.3	2.8 2.1	*
G.自分のやりたいことを見つけたい	専門学校・短大 大学	35.9 57.4	39.8 29.8	14.8 6.4	9.5 6.4	**

単位は%、カイニ乗検定の結果、有意差がある項目を*で示している。* p < .05, ** p < .01

図表4-1-2の結果に表れている特徴は、図表4-1-3の「現在の学校入学時点での保育職志望度」をたずねた結果にも読み取ることができる。「保育者以外考えていなかった」と回答した学生は、専門学校・短大は5割強であるが、大学は2割強であり、専門学校・短大の学生の方が多い。一方、大学の学生は「保育者は選択肢の1つだった」とする者が3割強にも及んでいる。「保育士になりたい気持ちはなかった」学生が1割近くいることも併せて、保育者になるための学習を開始した時点で、保育者が絶対的な目標になっていない学生がかなりの割合でいるのが、大学の保育者養成課程なのである。逆に専門学校・短大では、初期段階でほとんどが他の選択肢のない、確定的な目標として、その学習にのぞんでいることが読み取れる。

図表 4-1-3 現在の学校入学時点での保育職志望度

	保育者以外 考えていなかった	保育者は選択肢の トップだった	保育者は選択肢の 一つだった	保育者になりたい 気持ちはなかった
専門学校・短大	56.8	23.6	18.6	1.1
大学	26.4	27.5	37.4	8.8

単位は%

専門学校・短大には、高校3年生よりも前に進路を決定している学生が多いという結果（図表4-1-1）からは、進学に伴う進路決定に先立つ、自身の保育の経験の影響が大きいことが予想される。図表4-1-4と図表4-1-5はそれぞれ学生自身が幼児期に通っていた就学前施設と高校までに経験したことがある保育体験である。図表4-1-4に示すように、大学生の数名を除くほぼ全員が何らかの就学前施設に通った経験を持つこと、専門学校・短大と大学の学生の比較では専門学校・短大の学生は幼稚園と保育所がほぼ半々だが、大学は幼稚園に通っていた学生が40%、保育所に通っていた学生が65%と、保育所に通っていた学生が多かった。

一方、現在の学校に入学するまでに経験した保育体験は、「A.子どもの頃に小さい子の面倒を見ていた」「F.幼稚園や保育園に通っていた時の保育者との思い出がある」という自身の非保育体験については専門学校・短大と大学の双方共6割から7割が経験ありと回答している。しかし、「B.中学や高校における職場体験を、幼稚園や保育園で行った」「C.高校生の時に、保育科(保育コース)に所属していた」「E.高校生の時に、保育について学んだことがある」の3項目については、専門学校・短大の学生の経験が大学の学生よりも有意に高かった。高校への進学の際で保育という仕事が自身の職業として視野に入っており、高校の段階で既に保育士になるための学習を開始していた学生が、専門学校・短大の保育士養成コースへの進学者には多いことがわかる。

図表 4-1-4 幼児期に通っていた就学前施設

	幼稚園	保育所	両方	野外保育施設	行っていない	その他
専門学校・短大	45.2	47.3	6.0	0.4	0.0	1.1
大学	30.9	57.4	8.5	0.0	3.2	0.0

単位は%

図表 4-1-5 現在の学校入学前の保育体験

		経験あり	経験なし	
A.子どもの頃に、小さい子の面倒をみていた	専門学校・短大	66.0	34.0	
	大学	76.6	23.4	
B.中学や高校における職場体験等を、幼稚園や保育園で行った	専門学校・短大	74.0	26.0	*
	大学	60.6	39.4	
C.高校生の時に、保育科(保育コース)に所属していた	専門学校・短大	16.3	83.7	**
	大学	5.3	94.7	
D.高校生の時に、保育技術検定を受験したことがある	専門学校・短大	5.2	94.8	
	大学	5.3	94.7	
E.高校生の時に、保育について学んだことがある	専門学校・短大	48.6	51.4	**
	大学	18.1	81.9	
F.幼稚園や保育園などに通っていた時の保育者との思い出がある	専門学校・短大	64.6	35.4	
	大学	62.8	37.2	

単位は%、カイニ乗検定の結果、有意差がある項目を*で示している。* $p < .05$, ** $p < .01$

4-2 現在の学校における指導内容と学校経験

保育者養成校に入学した後、保育者養成カリキュラムのもとで学習し生活している学生は、現在の学校の学習や生活の中でどんな指導を受け、何を体験しているのだろうか。

まず、現在の学校での経験の中で学問以外にもボランティアやアルバイト等多くの取り組みがなされる学生時代であるが、その中でも保育にどの程度力を注いでいるかをたずねた。その結果、図表4-2-1に示すように、多くの学生が保育者になるための勉強に50%以上の労力を注いでいることが示された。ただし、60%以上の労力を注いでいるに限定すると専門学校・短大の学生が5割を超しているのに対して、大学は3割と両者に差が見られる。

図表 4-2-1 保育者になるための勉強に費やす労力

	専門学校・短大	大学
0.0	0.0	1.1
0.1-9.9	1.0	0.0
10.0-19.9	3.1	0.0
20.0-29.9	1.0	4.5
30.0-39.9	10.2	14.9
40.0-49.9	9.1	16.1
50.0-59.9	19.7	22.1
60.0-69.9	20.8	12.6
70.0-79.9	21.4	13.7
80.0-89.9	10.6	5.7
90.0-99.9	1.3	0.0
100.0	1.7	1.1
合計	100.0	100.0

単位は%

それでは、学生は、保育者養成カリキュラムのもと、1年生の時点で保育者養成校の教員からどのような指導を受けているのだろうか。図表4-2-2は現在の学校における指導についてたずねている。ここでは、A～Iの項目のうち「B.ピアノや手あそび、絵本の読み聞かせなどの技術」の項目以外、すべての項目において有意差がみられ、いずれも大学よりも専門学校・短大において「かなり受けた」の割合が高くなっている。とりわけ、「C.指導計画や指導記録の書き方」「E.実習での態度や言動」の差は大きい。これは多くの専門学校・短大において2年間で5つの実習を行うことから、実習に向けた取り組みを1年時の早い段階から行っていることによると推測される。これらに続いて両者の差が大きいものが「A.子ども理解の方法」「H.保育者としての振るまい方」「I.社会人としてのマナー」であり、これらも実習に行くことと関連して指導されていることが予想される。

図表 4-2-2 現在の学校で受けている指導内容

		かなり受けた	少し受けた	あまり受けていない	全く受けていない	
A.子ども理解の方法	専門学校・短大	62.3	36.4	1.3	0.0	*
	大学	45.7	53.2	1.1	0.0	
B.ピアノや手遊び、絵本の読み聞かせなどの技術	専門学校・短大	49.5	45.2	4.9	0.3	
	大学	56.5	39.1	2.2	2.2	
C.指導計画や指導記録の書き方	専門学校・短大	58.0	35.7	4.3	2.0	**
	大学	5.3	44.7	38.3	11.7	
D.保護者対応の仕方	専門学校・短大	11.8	35.7	40.3	12.1	**
	大学	2.1	18.1	37.2	42.6	
E.実習での態度や言動	専門学校・短大	55.9	34.2	6.3	3.6	**
	大学	14.9	37.2	24.5	23.4	
F.現場でのディスカッションの仕方	専門学校・短大	12.5	39.7	37.4	10.5	**
	大学	0.0	18.1	42.6	39.4	
G.現場でのトラブルへの対処方法	専門学校・短大	7.9	39.0	42.0	11.1	**
	大学	2.2	20.4	40.9	36.6	
H.保育者としての振るまい方	専門学校・短大	41.6	47.9	9.8	0.7	**
	大学	17.2	43.0	23.7	16.1	
I.社会人としてのマナー	専門学校・短大	35.4	47.9	14.8	2.0	**
	大学	14.9	55.3	20.2	9.6	

単位は%、カイニ乗検定の結果、有意差がある項目を*で示している。* p < .05, ** p < .01

それでは、より具体的に養成校での学習体験を確認しよう。図表4-2-3は、現在の学校における経験を示している。図表4-2-2の指導内容について専門学校・短大と大学の違いが確認されたのに対して、具体的な学習経験に関しては両者の差は大きくない。「A.メモを取りながら人の話を聞く」「B.少人数のグループになって話し合う」はいずれも9割以上が経験していると回答しており、「L.保育・幼児教育をより良くしてやろうという気持ちをもっている」と高い意欲を持って学習に臨んでいる学生も両者共に8割を超えている。また、意欲に関わる項目では、「I.保育・幼児教育に関するニュースに関心を持ってみたい、聞いたりする」も両者共に7割から8割が「している」と回答している。養成校での先生との関係については「E.わからないことや疑問点について先生にアドバイスを求める」学生は両者共に6割前後おり、比較的関わりを持っている学生は多い。ただし、より親密な「H.現在の学校の先生と個人的な話をする」は両者共に3割に留まる。

個人的な話をする親密な関係の低さと並んで注目したいのは、「D.友だちと議論してぶつかり合う」「G.他者の意見に対して違うと思ったときに、自分の意見を主張する」「J.保育・幼児教育の問題について友達と議論する」学生が5割以下に留まることである。既に示したように、対話のある学習機会が設けられているにもかかわらず、主体的で対話的で深い学びはまだ十分に達成されているとは言えない。

専門学校・短大と大学の間で差が確認された項目はわずか2項目に過ぎなかったが、ここでは「F.一度完成させたものをやり直す」に注目したい。これは、自分が納得いかなければ完成したものでもやりなおすという粘り強い姿勢が強いことを示しており、レジリエンスの観点から見ても保育においては重要な要素である。この回答において大学の肯定群の割合が高いという結果が得られたことは今後も注視していきたい。

図表 4-2-3 現在の学校における経験

		いつも している	しばしばして いる	あまり していない	全く していない
A.メモを取りながら人の話を聞く	専門学校・短大 大学	34.3 40.4	57.1 55.3	8.6 4.3	0.0 0.0
B.少人数のグループになって話し合う	専門学校・短大 大学	24.8 29.8	65.9 66.0	7.9 4.3	1.3 0.0
C.授業で自分の意見を発表する	専門学校・短大 大学	12.3 14.9	47.0 55.3	35.7 29.8	5.0 0.0
D.友だちと議論してぶつかり合う	専門学校・短大 大学	7.7 7.5	24.5 26.9	49.0 51.6	18.8 14.0
E.わからないことや疑問点について先生にアドバイスを求める	専門学校・短大 大学	15.6 12.9	39.2 51.6	35.5 30.1	9.6 5.4
F.一度完成させたものをやり直す	専門学校・短大 大学	5.6 9.7	27.8 40.9	47.7 44.1	18.9 5.4
G.他者の意見に対して違うと思ったときに、自分の意見を主張する	専門学校・短大 大学	6.3 7.4	34.9 41.5	44.5 44.7	14.3 6.4
H.現在の学校の先生と個人的な話をする	専門学校・短大 大学	7.3 4.3	21.9 26.6	36.5 42.6	34.2 26.6
I.保育・幼児教育に関するニュースに関心を持ってみたい、聞いたりする	専門学校・短大 大学	20.3 18.5	50.2 60.9	26.2 17.4	3.3 3.3
J.保育・幼児教育の問題について友達と議論する	専門学校・短大 大学	7.6 5.3	30.5 38.3	45.7 39.4	16.2 17.0
K.保育・幼児教育問題に関する情報を注意して知ろうとしている	専門学校・短大 大学	16.6 14.9	53.5 55.3	28.6 23.4	1.3 6.4
L.保育・幼児教育をより良くしてやろうという気持ちをもっている	専門学校・短大 大学	33.3 28.7	49.7 53.2	15.7 14.9	1.3 3.2

単位は%、カイニ乗検定の結果、有意差がある項目を*で示している。* p < .05, ** p < .01

図表4-2-4は、現在の学校での生活や考え方をたずねた結果である。専門学校・短大と大学の間に有意差があったのは10個の項目のうち「A.授業中友達がうるさくしていたら注意する」「B.先生や友達に注意されたらカチンとくる」「C.友達と対立しないようにしている」「D.合わない人と一緒にいたくない」「J.親から自立している」であり、他は差が無かった。

共通の特徴としては、「G.人のために頑張ることができる」「H.自分のために頑張ることができる」が共に9割前後の学生が「あてはまる」と回答している。「I.曲がったことは嫌いだ」が必ずしも「F.自分の考えを曲げない」ほどかたくなではない。このような内面と行動の相違については、友達との関係性という点において同様の傾向があると言ってよいかもしれない。先生や友達に注意されるとカチンとくるし、合わない人と一緒にいたくないが友達と対立しないようにしており、友達を注意することもあまりない。これらの傾向は、専門学校・短大と大学で有意差があり、専門学校・短大でその傾向が顕著に出ている。つまり、専門学校・短大においては、友達との関係においてカチンとくるなどの内面の変化を感じながらも、軋轢が生じないように振舞う傾向が高いと言える。ここにその友人関係が2年間と短いことの影響はないだろうか。注目したい論点の一つと言えるだろう。(千葉)

図表 4-2-4 現在の学校での生活や考え方

		あてはまる	ある程度あてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	
A.授業中友達がうるさくしていたら注意する	専門学校・短大	1.7	10.7	50.0	37.6	**
	大学	2.1	24.5	56.4	17.0	
B.先生や友達に注意されたらカチンとくる	専門学校・短大	1.3	9.1	42.6	47.0	**
	大学	0.0	5.3	62.8	31.9	
C.友達と対立しないようにしている	専門学校・短大	41.3	37.9	14.8	6.0	*
	大学	27.7	53.2	14.9	4.3	
D.合わない人と一緒にいたくない	専門学校・短大	40.6	37.9	16.1	5.4	*
	大学	29.8	43.6	25.5	1.1	
E.言っていることややっていることが違うことがある	専門学校・短大	11.1	35.4	42.1	11.4	
	大学	8.5	40.4	42.6	8.5	
F.自分の考えを曲げない	専門学校・短大	8.4	28.9	51.0	11.7	
	大学	7.4	31.9	46.8	13.8	
G.人のために頑張ることができる	専門学校・短大	45.0	49.0	5.7	0.3	
	大学	47.9	48.9	3.2	0.0	
H.自分のために頑張ることができる	専門学校・短大	35.2	49.3	14.1	1.3	
	大学	40.4	53.2	5.3	1.1	
I.曲がったことは嫌いだ	専門学校・短大	33.2	41.6	21.5	3.7	
	大学	23.4	56.4	18.1	2.1	
J.親から自立している	専門学校・短大	9.5	28.0	43.9	18.6	*
	大学	3.2	36.2	52.1	8.5	

単位は%、カイニ乗検定の結果、有意差がある項目を*で示している。* p < .05, ** p < .01

4-3 実習園での指導内容と実習経験

本節では、実習に関する指導内容や学生の実習経験を確認する。まず、1年生の時点で実習を行った経験のある学生は、専門学校・短期大学では8割、大学では3割弱だった(図表4-3-1)。1年時に実習を行った学生の実習先の種類をたずねたところ(図表4-3-2)、幼稚園での教育実習を行った学生は専門学校・短大で7割強、大学で2割だった。保育実習における保育所での実習は、両者共に1割に満たっておらず、施設での実習を行った大学の学生はいなかった⁽⁴⁾。それでは、実習を行った学生は、実習園でどのような指導を受け、何を経験したのかを

確認していこう。

図表 4-3-1 実習経験の有無

	経験あり	経験なし
専門学校・短大	80.9	19.1
大学	29.8	70.2

単位は%

図表 4-3-2 実習先の種類

		経験あり	経験なし
教育実習(幼稚園)	専門学校・短大	76.8	23.2
	大学	20.2	79.8
保育実習(保育所)	専門学校・短大	6.0	94.0
	大学	1.1	98.9
保育実習(施設)	専門学校・短大	4.0	96.0
	大学	0.0	100.0

単位は%

図表4-3-3は、実習園の先生から受けた指導内容についてたずねたものである。8項目のうち専門学校・短大と大学の間で有意差があったのは、「A.子ども理解の方法」「B.ピアノや手遊び、絵本の読み聞かせなどの技術」「C.日誌や指導計画の書き方」「D.保護者への対応」「E.先輩保育者との関わり方」の5項目であり、いずれも大学よりも専門学校・短大において指導を受けたと答えた割合が高くなっている。特に、「B.ピアノや手遊びなどの保育技術」「C.日誌や指導計画の書き方」の指導を「受けた」と回答している学生の割合は、専門学校・短大では7割から8割であるのに対し、大学では3割から4割であった。

図表 4-3-3 実習先の先生から受けた指導内容

		かなり受けた	少し受けた	あまり受けていない	全く受けていない	
A.子ども理解の方法	専門学校・短大	47.1	42.9	8.4	1.7	*
	大学	45.8	29.2	12.5	12.5	
B.ピアノや手遊び、絵本の読み聞かせなどの技術	専門学校・短大	27.7	47.1	15.5	9.7	**
	大学	12.5	29.2	16.7	41.7	
C.日誌や指導計画の書き方	専門学校・短大	43.3	39.5	11.8	5.5	**
	大学	8.7	26.1	26.1	39.1	
D.保護者への対応	専門学校・短大	4.2	18.5	43.7	33.6	*
	大学	4.2	4.2	25.0	66.7	
E.先輩保育者との関わり方	専門学校・短大	11.3	33.2	33.6	21.8	**
	大学	4.2	4.2	33.3	58.3	
F.実習で失敗したときの対応	専門学校・短大	19.1	37.3	32.6	11.0	
	大学	4.2	29.2	41.7	25.0	
G.言葉遣いや挨拶	専門学校・短大	42.9	28.2	20.6	8.4	
	大学	41.7	37.5	12.5	8.3	
H.服装や身だしなみ	専門学校・短大	43.3	22.7	23.1	10.9	
	大学	66.7	25.0	4.2	4.2	

単位は%、カイニ乗検定の結果、有意差がある項目を*で示している。* p < .05, ** p < .01

次に、1年生は実習を通して何を感じ、何を体験しているのかを確認する(図表4-3-4)。専門学校・短大と大学ともに、「A.子どもの関わることに喜びを感じた」「B.保育者になったらやってみたいことができた」「D.保育者の仕事の大変さを感じた」「H.現在の学校での学習意欲が高まった」「J.幼児教育への関心が高まった」という項目について8割から9割の学生が「あてはまる」と回答していた。この結果から、1年生は実習を行うことで、子どもや幼児教育への関心が高まり、やってみたいと思えることができ学習意欲が高まる様子がうかがえる。その一方で、こうした結果が必ずしも「保育者になる」ことへの自信につながるわけではないのか、

「K.保育者になる自信がなくなった」学生が専門学校・短大で5割強、大学で4割程度いた。専門学校・短大と大学の間で差が確認されたのは「E.園では丁寧な指導を受けた」「F.『こうなりたい』と思える保育者に会った」の2項目であり、大学よりも専門学校・短大において「あてはまる」の割合が高かった。特に、「F.『こうなりたい』と思える保育者に会った」という項目については、専門学校・短大では6割以上の学生が「あてはまる」と回答しているのに対して、大学では6割以上の学生が「あてはまらない」と回答していた。

図表 4-3-4 実習中に経験したこと

		あてはまる	ある程度あてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
A.子どもに関わることに喜びを感じた	専門学校・短大	82.4	16.8	0.8	0.0
	大学	83.3	16.7	0.0	0.0
B.保育者になったらやってみたいことができた	専門学校・短大	33.6	45.8	18.5	2.1
	大学	41.7	45.8	12.5	0.0
C.評価が気になってやりたいようにできなかった	専門学校・短大	11.0	26.6	44.3	18.1
	大学	4.2	33.3	50.0	12.5
D.保育者の仕事の大変さを感じた	専門学校・短大	81.9	17.2	0.8	0.0
	大学	66.7	29.2	4.2	0.0
E.園では丁寧な指導を受けた	専門学校・短大	55.9	33.2	6.3	4.6
	大学	25.0	50.0	20.8	4.2
F.『こうなりたい』と思える保育者に会った	専門学校・短大	31.9	34.0	24.4	9.7
	大学	8.3	25.0	41.7	25.0
G.現在の学校で勉強していることと現実のずれを感じた	専門学校・短大	17.6	35.7	39.1	7.6
	大学	8.3	20.8	62.5	8.3
H.現在の学校での学習意欲が高まった	専門学校・短大	26.9	54.2	16.4	2.5
	大学	41.7	54.2	4.2	0.0
I.日本の保育・幼児教育の問題点も見えてきた	専門学校・短大	14.3	36.7	41.8	7.2
	大学	16.7	41.7	41.7	0.0
J.幼児教育への関心が高まった	専門学校・短大	50.4	39.8	8.5	1.3
	大学	50.0	50.0	0.0	0.0
K.保育者になる自信がなくなった	専門学校・短大	24.2	33.9	34.3	7.6
	大学	12.5	29.2	37.5	20.8
L.現場の嫌なところを知った	専門学校・短大	12.2	33.8	39.2	14.8
	大学	12.5	37.5	37.5	12.5

単位は%、カイニ乗検定の結果、有意差がある項目を*で示している。* p < .05, ** p < .01

さて、実習を経験した後に、保育と保育者に対するイメージ、そして保育職への志望度はどう変わるのだろうか(図表4-3-5)。どの項目をみても、専門学校・短大と大学ともに「良くなった」と答えた学生の割合が、「悪くなった」と答えた学生の割合よりも高い。特に、実習後に「A.保育へのイメージ」が「良くなった」と答えた学生は両者共に5割以上に及ぶ。一方、「C.保育職志望度」が「悪くなった」と回答した学生の割合は専門学校・短大で20.9%、大学で12.0%であり、他の2つの項目よりも高かった。

図表 4-3-5 実習後の保育や保育者のイメージと保育職への志望度

		とても良くなった	少し良くなった	かわらない	少し悪くなった	悪くなった
A.保育のイメージ	専門学校・短大	22.9	34.3	37.7	3.8	1.3
	大学	32.0	20.0	44.0	4.0	0.0
B.保育者のイメージ	専門学校・短大	22.9	29.2	38.1	9.3	0.4
	大学	24.0	12.0	56.0	4.0	4.0
C.保育職志望度	専門学校・短大	18.7	25.5	34.9	18.7	2.1
	大学	36.0	12.0	40.0	12.0	0.0

単位は%、カイニ乗検定の結果、有意差がある項目を*で示している。* p < .05, ** p < .01

以上、1年生は実習を経験することで、幼児教育・保育に対する関心や意欲は高まり、保育や保育者へのイメージもそう悪くはならないが、保育者の仕事の大変さ感じ、保育者になる自信を喪失させていることが予測される。(酒井)

4-4 保育職に対する意識

図表4-4-1は、保育職のイメージをたずねている。多くの項目は専門学校・短大と大学とで回答の傾向はかわらない。肯定群の数値が高い項目は、「A.やりがいがある」「B.忙しい」「D.専門性が高い」「E.子ども愛が必要」「F.体力を使う」「G.楽しくできる」「I.笑顔でいられる」「Q.責任が伴う」となっている。

図表 4-4-1 保育職に対するイメージ

		とても そう思う	まあ そう思う	あまりそう思 わない	全くそう 思わない	
A. やりがいがある	専門学校・短大	79.2	19.5	1.0	0.3	
	大学	75.3	24.7	0.0	0.0	
B. 忙しい	専門学校・短大	83.4	15.9	0.6	0.0	
	大学	81.5	18.5	0.0	0.0	
C. 生活に困らない	専門学校・短大	2.3	25.4	60.6	11.7	
	大学	0.0	22.8	68.5	8.7	
D. 専門性が高い	専門学校・短大	72.3	25.4	2.3	0.0	*
	大学	51.1	45.7	3.3	0.0	
E. 子ども愛が必要	専門学校・短大	82.6	16.7	0.7	0.0	
	大学	80.4	19.6	0.0	0.0	
F. 体力を使う	専門学校・短大	89.0	11.0	0.0	0.0	
	大学	91.3	8.7	0.0	0.0	
G. 楽しくできる	専門学校・短大	39.9	52.0	7.8	0.3	
	大学	37.0	58.7	4.3	0.0	
H. 尊敬される	専門学校・短大	22.4	53.9	21.8	1.9	
	大学	19.6	63.0	17.4	0.0	
I. 笑顔でいられる	専門学校・短大	39.6	51.9	8.4	0.0	
	大学	33.7	55.4	10.9	0.0	
J. 一生続けられる	専門学校・短大	16.6	42.5	35.4	5.5	
	大学	13.0	40.2	37.0	9.8	
K. 創造的である	専門学校・短大	41.8	53.6	4.2	0.3	
	大学	38.0	58.7	2.2	1.1	
L. 学び続けなければならない	専門学校・短大	78.2	20.5	1.3	0.0	
	大学	69.6	30.4	0.0	0.0	
M. 人の役に立つ	専門学校・短大	78.8	20.5	0.7	0.0	
	大学	68.5	31.5	0.0	0.0	
N. 複雑である	専門学校・短大	47.9	37.5	12.1	2.6	
	大学	43.5	39.1	16.3	1.1	
O. 自分に合っている	専門学校・短大	17.0	63.0	17.7	2.3	
	大学	17.4	63.0	18.5	1.1	
P. 誰でもできる	専門学校・短大	1.6	10.7	48.5	39.1	*
	大学	1.1	21.5	47.3	30.1	
Q. 責任が伴う	専門学校・短大	97.7	2.3	0.0	0.0	
	大学	96.7	3.3	0.0	0.0	

単位は%、カイニ乗検定の結果、有意差がある項目を*で示している。* p < .05, ** p < .01

一方「H.尊敬される」「N.複雑である」「O.自分に合っている」は、そこまで肯定群が多いわけではなく、回答にばらつきがある。特に「J.一生続けられる」は約5割のみが肯定群で、継

統的なキャリアをイメージしない学生も半数ほどいる。他方「C.生活に困らない」「P.誰でもできる」については、否定群が多くなっている。

専門学校・短大と大学とで回答傾向に違いがあったものは「D.専門性が高い」「P.誰でもできる」であり、専門学校・短大の場合、保育職をより「専門性が高い」「誰でもできるものではない」と考えている。

続いて、図表4-4-2は、図表4-4-1であげた以外の保育者のイメージを記述式でたずねている。

図表 4-4-2 保育職に対するイメージ（自由記述）

専門学校・短大(N=308)

項目	回答	件数
職業上の能力・資質	常に子供第一に考える 笑顔でいなければならない 常に子どもの安全と健康に配慮しなければならない コミュニケーションが必要である 考えなければならないことが沢山ある コミュニケーション能力が高い 保護者との関わりが大切、など	15件
職業の魅力・やりがい	周りを笑顔に、明るくすることができる 子どもの成長を見守り、支援するとてもやりがいのある仕事 子どもの成長を見守ることができるし、自分自身も成長することができる 子どもの大切な時期に携われる貴重な仕事 社会に貢献できる 1人が同じ学びをして、同じ答えが出せるとは限らないから面白い、など	12件
職業上の地位	給料が安く大変なイメージ 仕事量と給料が見合っていない 社会的地位が低い 自分の趣味の時間を持ってない 子供をただ預かるだけでなくたくさんの仕事がある割に給料が少ないと思う、など	20件
労働環境	壁面を作ったり発表会の準備をしたりして夜遅くまで仕事しているイメージ 仕事につきっきりになりそう 睡眠時間が少ない 離職率が高く大変 日誌や日案、指導案保護者とのやりとりが大変そう、など	10件
労働環境(人間関係)	職場内の人間関係が複雑な印象 人間関係が大変そう 職員同士の人間関係があまり良くない 人間関係がめんどくさい、など	7件
パーソナリティ	元気で明るい人がなっている。ピアノがとくい。子どもがすき しっかり者が多い 明るく前向き。行動力、責任感がある	3件
その他・類別不可		2件
合計		69件

大学(N=94)

項目	回答	件数
職業上の能力・資質	子どもたちの保護者と良い関係でなければならない 洞察力、観察力 保護者との距離が近い	3件
職業の魅力・やりがい	楽しそう 子どもの成長に影響を与える	2件
職業上の地位	仕事に見合った給料ではないと思う、離職率が高い 仕事量と給料があわない 給料が安い、など	10件
労働環境	残業が多い すごくブラックな職 ストレスが多そう 職員1人の負担が大きい	4件
労働環境(人間関係)	保育士間の人間関係が大変	2件
パーソナリティ	コミュニケーションが上手	1件
合計		22件

自由記述の内容を専門学校・短大と大学別に類型化している。類型の結果「職業上の能力・資質」「職業の魅力・やりがい」「職業上の地位」「労働環境」「労働環境（人間関係）」「パーソナリティ」が多く回答がみられた。「職業の魅力・やりがい」「職業上の地位」とともに、「職業上の地位」「労働環境」が多いのが注目される。保育職のやりがいや意義を感じつつも、給料の低さや労働環境の厳しさを学生たちは強く意識していると言える。さらに、職場での人間関係についても、学生の不安が回答に表れている。専門学校・短大と大学とで比較するのは難しいが、大学の場合やや職業の地位に関する言及が多くなっていると言える。

図表4-4-3では、「保育職志望の理由」をたずねている。多くの項目で、専門学校・短大と大学とで大きく回答傾向は変わらない。理由として多いのが「A.子どもが好きだから」「D.やりがいがある」、次に多いのが「B.憧れる保育者と出会った」「C.自分の特技を活かせる」「H.日本の保育をより良くしたい」となっている。一方「E.社会的な評価が高い」「G.免許・資格が必要な専門職に就きたい」は、肯定群が5割程度で理由としては多くない。また「F.一生続けることができる」は専門学校・短大と大学で数値が異なっており、大学の学生ほど一生続けられることが理由で、保育職を志望しているわけではないことがわかる。

図表 4-4-3 保育職志望の理由

		あてはまる	ある程度あてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない
A. 子どもが好きだから	専門学校・短大	81.1	16.8	1.7	0.3
	大学	76.3	23.7	0.0	0.0
B. 憧れる保育者と出会った	専門学校・短大	33.9	31.1	28.0	7.0
	大学	23.7	28.9	34.2	13.2
C. 自分の特技を活かせる	専門学校・短大	20.3	37.1	38.8	3.8
	大学	11.8	42.1	38.2	7.9
D. やりがいがある	専門学校・短大	49.1	42.1	7.0	1.8
	大学	39.5	53.9	6.6	0.0
E. 社会的な評価が高い	専門学校・短大	5.6	26.0	53.0	15.4
	大学	2.6	18.4	59.2	19.7
F. 一生続けることができる	専門学校・短大	19.8	33.6	36.4	10.2
	大学	6.6	28.9	48.7	15.8
G. 免許・資格が必要な専門職に就きたい	専門学校・短大	13.7	24.9	35.1	26.3
	大学	6.6	17.1	48.7	27.6
H. 日本の保育をより良くしたい	専門学校・短大	12.9	45.5	33.2	8.4
	大学	7.9	59.2	26.3	6.6

単位は%、カイニ乗検定の結果、有意差がある項目を*で示している。* p < .05, ** p < .01

図表4-4-4は、「保育者になってから重視すること」をたずねている。肯定群が多いのは「A.子どもとたくさん遊ぶ」「B.保育実践について同僚になんでも相談する」「C.他のクラスや同僚の保育実践から学ぶ」「D.創意工夫を活かした保育実践を行う」「J.保護者に信頼されるよう努める」「K.子どもの前では笑顔でいる」など、幅広い項目を重視している。一方「E.自分の理想の保育・幼児教育にこだわりつづける」の肯定群は6割程度となっている。またプライベートに関しても「R.他人の子どもよりも、自分自身の子どもの育てたい」の肯定群は6割と数値が低い。

この質問では専門学校・短大と大学と差がある項目が多く、「H.保護者が望むことをする」「J.保護者に信頼されるよう努める」「M.先輩を恐れない」「O.子どもの絶対的な味方になる」「P.先

輩の意見に素直に従う」は専門学校・短大の学生の方がより強く肯定する傾向がある。他方「I. しつげをしっかりとやる」については逆に大学の学生の方がより強く肯定している。

図表 4-4-4 保育者になったら重視したいこと

		とても重視 すると思う	まあ重視 すると思う	あまり重視 しないと思う	全く重視 しないと思う
A. 子どもとたくさん遊ぶ	専門学校・短大 大学	84.2 62.3	14.8 36.4	0.7 1.3	0.4 0.0
B. 保育実践について同僚になんでも相談する	専門学校・短大 大学	39.1 32.1	51.1 56.4	8.8 11.5	1.1 0.0
C. 他のクラスや同僚の保育実践から学ぶ	専門学校・短大 大学	62.6 65.4	34.9 34.6	2.5 0.0	0.0 0.0
D. 創意工夫を活かした保育実践を行う	専門学校・短大 大学	62.6 60.3	34.5 38.5	2.8 1.3	0.0 0.0
E. 自分の理想の保育・幼児教育にこだわりつづける	専門学校・短大 大学	20.6 7.7	40.1 43.6	36.2 44.9	3.2 3.8
F. 採用された後も保育・幼児教育について学び続ける	専門学校・短大 大学	55.6 56.4	39.1 42.3	4.9 1.3	0.4 0.0
G. 自分の保育を他の保育者にどんどん見てもらう	専門学校・短大 大学	25.7 25.3	45.1 56.0	27.1 18.7	2.1 0.0
H. 保護者が望むことをする	専門学校・短大 大学	29.3 13.0	54.8 63.6	13.8 23.4	2.1 0.0
I. しつげをしっかりとやる	専門学校・短大 大学	20.8 20.8	46.1 62.3	28.5 16.9	4.6 0.0
J. 保護者に信頼されるよう努める	専門学校・短大 大学	73.6 55.8	23.2 44.2	3.2 0.0	0.0 0.0
K. 子どもの前では笑顔でいる	専門学校・短大 大学	79.8 72.7	18.4 26.0	1.8 1.3	0.0 0.0
L. 先輩保育者にも自分の意見を伝えていきたい	専門学校・短大 大学	34.9 23.4	50.4 61.0	13.0 15.6	1.8 0.0
M. 先輩を恐れない	専門学校・短大 大学	23.3 9.1	48.1 67.5	22.3 20.8	6.4 2.6
N. 職場の雰囲気を良くしようと努める	専門学校・短大 大学	40.3 45.5	49.1 49.4	9.5 5.2	1.1 0.0
O. 子どもの絶対的な味方になる	専門学校・短大 大学	64.0 39.0	31.4 48.1	4.6 11.7	0.0 1.3
P. 先輩の意見に素直に従う	専門学校・短大 大学	29.3 9.1	55.5 64.9	13.8 24.7	1.4 1.3
Q. 子どものためならば自分の時間を惜しまない	専門学校・短大 大学	23.0 19.5	51.1 61.0	22.0 14.3	3.9 5.2
R. 他人の子どもよりも、自分自身の子どもを育てたい	専門学校・短大 大学	18.4 10.4	40.1 45.5	34.8 36.4	6.7 7.8
S. 職場の人とはプライベートでも親しくする	専門学校・短大 大学	22.3 14.3	44.9 51.9	26.1 29.9	6.7 3.9

単位は%、カイニ乗検定の結果、有意差がある項目を*で示している。* p < .05, ** p < .01

図表4-4-5では、「保育職とキャリア展望」を聞いている。専門学校・短大と大学で回答が異なっており、専門学校・短大の場合、「B.自分がいつか園長副園長になることを想像できる」「C. いくつか自分の理想の園を創ってみたいと思う」「E.もっと専門的に保育を学びたい」により否定的で、また「F.結婚・出産を機に保育職を辞め」、 「H.パートで保育職をつづけたい」と考えている学生が多い。「G.正規職員戻りたい」については、回答分布が分かれているため肯定群の割合だけみれば、大学の学生の方が正規職としてのキャリアをより望んでいることがわかる。

図表 4-4-5 保育職とキャリア展望

		あてはまる	ある程度あてはまる	あまりあてはまらない	全くあてはまらない	
A. 担任として自分のクラス運営をしたい	専門学校・短大	26.3	47.0	20.6	6.0	
	大学	23.7	53.9	21.1	1.3	
B. 自分が園長や副園長になることを想像できる	専門学校・短大	2.2	6.8	36.6	54.5	**
	大学	1.4	14.9	50.0	33.8	
C. いつか自分の理想の園を創ってみたいと思う	専門学校・短大	8.2	12.9	32.9	46.1	*
	大学	9.5	16.2	47.3	27.0	
D. 園の責任あるポストには就きたくない	専門学校・短大	17.1	36.8	36.4	9.6	
	大学	10.8	41.9	41.9	5.4	
E. もっと専門的に保育を学びたい	専門学校・短大	21.0	44.8	27.4	6.8	*
	大学	27.6	55.3	17.1	0.0	
F. 結婚・出産を機に保育職を辞めるかもしれない	専門学校・短大	30.6	37.0	22.1	10.3	**
	大学	11.8	47.4	36.8	3.9	
G. 仮に一度仕事をやめても、子育てが落ち着いたら、正規職員として保育職に戻りたい	専門学校・短大	40.2	37.0	16.4	6.4	*
	大学	28.9	57.9	10.5	2.6	
H. 正規職員ではなく、パートで保育職をつづけたい	専門学校・短大	18.0	29.1	34.5	18.3	**
	大学	0.0	25.0	52.6	22.4	

単位は%、カイニ乗検定の結果、有意差がある項目を*で示している。* p < .05, ** p < .01

4-5 保育と社会に対する意識

図表4-5-1では、「コロナ禍における保育所開所に対する考え方」を聞いている（「2020年2月末に、新型コロナウイルスの感染拡大を受け、国は学校に「一律休校」を要請した一方、保育所には「原則開所」を求めました。あなたは次のA～Gのことについてどう思いますか」）。

図表 4-5-1 コロナ禍における保育所開所に対する考え方

		そう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	全くそう思わない
A. 子どもの感染リスクが高まるので閉鎖	専門学校・短大	7.4	43.2	45.3	4.1
	大学	9.6	57.4	30.9	2.1
B. 保育士の感染リスクが高まるので閉鎖	専門学校・短大	7.8	39.5	48.0	4.7
	大学	8.5	51.1	38.3	2.1
C. 働く保護者が子どもを保育所に預けるため開所	専門学校・短大	31.2	58.0	10.5	0.3
	大学	20.2	71.3	8.5	0.0
D. 保育士が給料をもらうため開所	専門学校・短大	9.5	44.6	36.5	9.5
	大学	9.6	41.5	36.2	12.8
E. 子どもの権利を保障するため開所	専門学校・短大	29.5	51.9	16.3	2.4
	大学	18.1	54.3	26.6	1.1
F. 学校は休校なのだから保育所閉鎖	専門学校・短大	4.4	24.7	55.3	15.6
	大学	5.3	31.9	56.4	6.4
G. 保育所だけ割に合わない	専門学校・短大	12.6	27.9	42.5	17.0
	大学	10.6	34.0	45.7	9.6

単位は%、カイニ乗検定の結果、有意差がある項目を*で示している。* p < .05, ** p < .01

数値が高いものとして「C.働く保護者が子どもを保育所に預けるため開所」「E.子どもの権利を保障するため開所」は肯定群が多い。次の多いのが「A.子どもの感染リスクが高まるので閉鎖」「B.保育士の感染リスクが高まるので閉鎖」「D.保育士が給料をもらうため開所」で、これらは肯定群と否定群とで考えが分かれている。一方「G.保育所だけ割に合わない」は否定群が多い。専門学校・短大と大学とで回答が異なるのは「E.子どもの権利を保障するため開所」で、専門学校・短大の学生の方が、肯定群が多くなっている。

図表4-5-2では、「コロナ禍における保育所開所ニュースに対する反応」をたずねている（「Q8」にある「新型コロナウイルスの感染拡大を受け、国は学校に「一律休校」を要請した一方、

保育所には「原則開所」を求めた」というニュースに対するあなたの態度はどうでしたか)。
 「ニュースを知り考えた」が約5割、「ニュースを知ったが考えたことはない」が約4割と、
 反応が分かれている。また専門学校・短大と大学とで回答傾向が異なり、大学の場合「ニュー
 スを知り考えた」が多く、「ニュースを知り友達と議論」「ニュースを知らなかった」が少ない。
 (中村)

図表 4-5-2 コロナ禍における保育所開所ニュースに対する反応

		ニュースを知り 友達と議論	ニュースを知り 考えた	ニュースを知ったが 考えたことはない	ニュースを 知らなかった
コロナ禍の保育所開所について	専門学校・短大	4.1	47.1	39.0	9.8
	大学	0.0	55.3	41.5	3.2

単位は%、カイニ乗検定の結果、有意差がある項目を*で示している。* p < .05, ** p < .01

5. 考察

5-1 カリキュラムの違いが養成校の文化に与える影響

全体的な傾向として、専門学校・短大の学生の方が、大学の学生よりも、より強く保育者になることを志向し、保育に関する学習にも力を入れている姿がみてとれる。

進学動機をみると、専門学校・短大生群の学生は、4年制大学の学生と比べ、入学の時点で保育者になりたいという意志をより強く持っていることがわかった。また、専門学校・短大の学生の方が、高校までのカリキュラムの中で、職場体験を経験したり、保育コースに所属して保育に関する授業を受けたりした経験のある者が多いことも明らかになった。大学生群に比べ、小学校や中学校の頃から保育者を志望している者が一定数いることから、専門学校・短大の学生は比較的早期から保育の仕事に興味をもち、保育に関する経験や学習を積んでから養成校へ進学する傾向が高いと言える。

このように専門学校・短大は、入学前から高いモチベーションをもって保育者をめざしている学生が大多数を占めるのに対し、大学は入学時点で保育者になることだけを目指している学生は26.4%に留まっている。この要因として、調査対象である4年制の教員養成大学は、小学校や中学校の教員など卒業後に多様な就職の選択肢があり、4年間の学習や実習経験を通して自分にあった進路を定めていく時間的余裕があることが挙げられる。大学生は、入学時点では将来の職業を保育者だけに絞らず、さまざまな可能性を視野に進学先を決める傾向があると言える。

両者の温度差は、現在の学校生活の中で、保育に関連する学習に注ぐ労力の差にも現れている。保育者になるための学習に50%以上の労力を注いでいる学生の割合は、専門学校・短大の学生は7割であるのに対し、大学の学生は6割程度に留まっている。この差は、専門学校・短大生の方が保育者の志望度が高く、保育に関する学習により熱心に取り組んでいることのあらわれともとれるが、専門学校・短大と大学とのカリキュラムのちがいが影響している可能性がある。4年制大学の1年時は共通教育科目の学習が中心で、保育の専門科目の学習や実習が本格的に始まっていないのに対し、専門学校・短大では1年時から幼稚園や保育所等での実習がカリキュラムに組みこまれており、実習に必要な知識やスキルの習得などに多くの時間を費や

すことになるためである。

専門学校・短大は、入学後、比較的短期間のうちに、学生を学外の実習に送り出さねばならないため、学生の側も教員の側も、否応なく実習のための準備に追われることとなる。学生が養成校で指導を受けた内容を見ると、手遊びや絵本の読み聞かせなどの保育スキルについては指導の程度に差はないが、「指導計画や指導記録の書き方」など実習の評価に直結する事柄については、専門学校・短大の方が手厚く指導を行っていることが見て取れる。特に、「実習での態度や言動」「保育者としての振るまい方」「社会人としてのマナー」などについては、専門学校・短大の方が「かなり受けた」と回答している学生の割合が多い。ここには、幼稚園や保育所など学外の施設に学生を送り出すにあたって、規律訓練的な指導にも力を入れざるをえない養成校の事情が透けて見える。

実習園で「言葉遣いや挨拶」「服装や身だしなみ」についての指導を受けた学生が多いことからもうかがえるように、社会人としての基本的な態度を身につけさせることについては、実習先の施設から養成校に直接求められることも多い。養成校における指導は、こうした実習先の要請や要望をある程度反映させた内容になるため、特に学生を早期に実習に送り出さねばならない専門学校・短大では、礼儀正しさを求めるなどの規律訓練的な文化が色濃くなる傾向があるのではないかと推測される。

5-2 人間関係に敏感な学生の傾向性：保育職のイメージから

保育職に対しては、専門学校・短大生群、大学生群ともに「責任を伴う」が最も多く、次いで「体力を使う」「忙しい」「子ども愛が必要」などの順になっている。いずれも子どもを相手にする仕事ならではのイメージであり、これらが「やりがいがある」「学び続けなければならない」「人の役にたつ」といったイメージのポイントの高さにもつながっていると見える。

大学生群では、「専門性が高い」という項目に対し「とてもそう思う」と回答した学生は約5割しかおらず、「誰でもできる」という項目を肯定するポイントが専門学校・短大よりも高いことから、大学の学生の方が保育者の専門性を低く見積もる傾向があると見える。保育職のイメージに関する自由記述の回答をみても、大学生は仕事量と給料が釣り合わないなどの「職業上の地位」や、残業が多いなどの「労働環境」の問題への言及が比較的多く、どちらかというとい保育職を取り巻くシステムの課題に目を向ける傾向があると見える。

専門学校・短大生群では、「楽しくできる」「尊敬される」「笑顔でいられる」といったポジティブなイメージに対する「とてもそう思う」のポイントが高く、ややナイーブに保育職のイメージを捉えている傾向がある。自由記述の回答においても、「職業上の地位」や「労働環境」の問題への言及は見られるが、それ以外に、子どもの成長を見守ることができるといった「職業の魅力・やりがい」や、元気で明るい人といった保育者の「パーソナリティ」など、ポジティブな側面にも一定の言及がある。また、労働環境の中でも、特に職場の人間関係の問題にクローズアップした言及があるのが特徴である。

専門学校・短大の学生の方が人間関係に敏感な傾向は、「保育者になってから重視すること」

への回答にもあらわれている。専門学校・短大生群は「保護者が望むことをする」「保護者に信頼されるよう努める」といった保護者との人間関係、「子どもの絶対的な味方になる」という子どもとの人間関係、「先輩の意見に素直に従う」「先輩を恐れない」といった職場の同僚との人間関係に関する項目について、いずれも大学生群よりも強く肯定している。また、専門学校・短大の学生は、ふだんの学校生活の中でも、「友達と対立しないようにしている」「合わない人と一緒にいたくない」など、友達との人間関係に気を遣っている様子が見て取れる。

目の前の相手との人間関係を重視し、人との関わりに気を遣うという傾向性それ自体は否定されるべきものではないが、職業的社会化の過程では、こうした特性が本人を苦しめる可能性があることにも注意が必要だろう。たとえば、職場でトラブルが起こったとき、現場のシステムに問題がある場合にも、相手との関わり方に問題があったのではないかと考え、過度に責任を感じて、燃え尽きてしまう可能性があるからである。

今回の調査では、人間関係に敏感な特性の形成に、専門学校・短大での教育がどの程度影響を与えているのかまではわからないが、実習園で「保護者への対応」や「先輩保育者との関わり方」の指導を「受けた」という学生が専門学校・短大生群で多かったことから、実習経験の中でも人間関係重視の傾向性を強化するような働きかけが行われていることが推測される。こうした傾向性が、学生の社会化のプロセスにどのように影響を与えるのか、今後の調査の中で注視していくべきポイントであると言える。

5-3 キャリアイメージ

保育職のイメージに関しての設問でも、保育職の志望理由の設問でも、「一生続けられる」という項目への肯定は半数程度かそれ以下であり、保育職が一生続けられる仕事であるという認識は、両群とも低い結果となった。特に、専門学校・短大生群はキャリアの展望について、「結婚・出産を機に保育職を辞める」という項目への肯定群が約7割となっており、卒業して保育施設に就職しても、さしあたり結婚・出産までの短期間の展望しか持っていない学生が多いと言える。また、専門学校・短大生群は、管理職になることや、理想の園を作るといったキャリアアップに対しても否定的な傾向がみられる一方、「パートで保育職をつづけたい」という志向が、大学生群より高い。長期間継続して同じ園や、同じ自治体の保育士として働き、キャリアを積むという考えは最初から持っておらず、結婚や出産などのライフイベントに合わせて仕事を辞めたり、勤務形態を変えたりすることを前提としたキャリアイメージを持っていることがうかがえる。

専門学校・短大の学生にとっては、結婚・出産時の中途退職はいわば既定路線であり、上昇志向も少ないことから、キャリアが中断されることへの抵抗感もほとんどないのかもしれない。これまで、保育者の早期離職は、給与の低さや労働条件の悪さなどが主な要因と考えられてきた。庭野(2020)は、保育者の離職意向を規定する要因として、給与や1ヶ月の平均勤務日数、1日の平均労働時間、勤務の融通性などの、労働環境や処遇の問題が関連していることを明らかにしているが、これ以外に、配偶者の有無や勤務年数との関連も指摘している。すなわち配

偶者がいる保育者や、勤務年数が短い保育者の方が離職する意向が高いということである。これは処遇にかかわらず、結婚・出産などを機に仕事を辞め、短期間で職場を移る保育者が一定数いることを示すものであり、今回の調査で明らかになった学生のキャリアイメージと一致する。

もし、こうしたライフイベントに合わせた離職や、短期での転職を前提とした学生のキャリアイメージが、保育者の早期離職を一定の割合で生み出しているのだとすると、これを解消するためには、女性の働き方を見直すこととともに、保育の専門職として継続して働くことに意義を見出せるような、保育者の職業的地位の向上が欠かせないと言える。

6. おわりに

今回の調査では、保育者養成校1年生について、専門学校・短大と大学との比較を行った。2年制の専門学校・短大と、4年制の大学とでは、カリキュラムの進行が異なるため、実習経験の程度や専門科目の学習の進度などに差があり、同じ学年とはいえ単純に比較することはできない。今回、明らかになった両者のあいだのさまざまな違いが、どのような要因によって生み出されているのか、今後さらなる分析が必要である。(山口)

〈注〉

- (1) 久富(1988)は、私たちにとって身近なようでありながら、見えにくい教員の世界にアプローチし、これのあり方を解明するにあたって「教員文化」という概念を設定している。教員文化とは、「教員たちの世界に特有のものの考え方や行動の仕方、という意味での『文化』」(久富1994: 11)であり、教師の仕事に付随するさまざまな困難や課題を乗り越えるなかで、教師たちが学校現場で築き上げてきた独自の職業文化(山田2011)のことを指す。同様に、保育者にも困難等乗り越えるなかで、保育現場で築いている独自の職業文化があるのではないかという仮説のもと、本稿では保育者(保育士)の文化という言葉を使用している。
- (2) 教職課程の学生のパネル調査を行った中村ら(2016)は、学生調査では、同じ学生に継続的に調査協力を得ること、当該の学生を対象として調査を実施することが困難なため、大量のパネルデータを作成することが難しいことを報告している。
- (3) 保育者養成校の多くは、幼稚園教諭免許と保育士資格の両方を取得できるカリキュラムにしている。幼稚園教諭免許と保育士資格の両方を取得する学生は、幼稚園免許のための教育実習と保育士資格のための保育実習を行うことになるため、修業年限が2年である専門学校や短期大学のカリキュラムには、1年次から教育実習と教育実習事前事後指導、そして保育実習と保育実習事前事後指導が用意されている。そこで本調査では、カリキュラムが似ている専門学校と短期大学を一括りにし、専門学校・短大と大学を区分して分析を行った。
- (4) なお、1年次のカリキュラムに実習が組み込まれていたとしても、今回の調査時には新型コ

コロナウイルス感染症の影響で、1年次の実習が困難であったこと、そのため実習ができていない可能性があることを留意する必要がある。

〈参考文献〉

- 日野さくら, 高野亜紀子, 利根川智子, 和田明人, 2018, 「保育者養成校における就職支援についての一考察－就職前後での就業イメージのズレおよび養成段階の就職支援として期待する内容に着目して－」東北福祉大学教職課程支援室『教職研究2017』pp.69-82
- 川村光, 長谷川哲也, 中村 瑛仁, 紅林伸幸, 越智康詞, 加藤隆雄, 藤田武志, 油布佐和子, 2015, 「2012-2013年度調査からみる教職志望学生の社会意識の経年変化－教員養成改革の理想と現実(2)－」『関西国際大学紀要』16, pp.21-34
- 川村光, 紅林伸幸, 長谷川哲也, 2018, 「実践的指導力重視時代の教育実習の現状と課題－教職志望学生に対する2016年度質問紙調査から－」『関西国際大学研究紀要』19, pp.1-16
- 久富善之, 1988, 『教員文化の社会学的研究』多賀出版
- 久富善之, 1994, 『日本の教員文化－その社会学的研究』多賀出版
- 紅林伸幸, 川村光, 2001, 「教育実習への縦断的アプローチ－大学生の教職志望と教師化に関する調査研究(2)－」『滋賀大学教育学部紀要教育科学』51, pp.77-92
- 中村瑛仁, 長谷川哲也, 紅林伸幸, 川村光, 2016, 「教職志望大学生の教職観・指導観と社会意識－4年間のパネル調査による経年分析から」『大阪大学教育学年報』22, pp.27-41
- 庭野晃子, 2020, 「保育従事者の離職意向を規定する要因」『保育学研究』58(1), pp.105-114
- 谷川夏実, 2018, 『保育者の危機と専門的成長 幼稚園教員の初期キャリアに関する質的研究』学文社
- 山田哲也, 2011, 「『教育改革』を捉え直す 教育改革と教員文化」『教育改革の社会学－犬山市の挑戦を検証する－』岩波書店

[付 記]

本研究は、科学研究費助成金「保育者の予期的／職業的社会化過程と保育者文化に関する実証的研究」(課題番号20K02577, 研究代表者: 酒井真由子)による研究成果の一部である。